

体験を通して、新聞とかかわり、主体的に受信・発信のできる子ども

～記事を書いた人や記事の向こう側にいる人の思いに

寄り添いながら、自分と外の世界をつなぐ扉を開こう～

長野県南安曇郡豊科町立豊科北小学校 三 澤 浩

## 1. 実践の概要

### (1) テーマ設定の理由

昨年度は、学級の中核的な活動と関係する新聞記事を利用して、読みを深めていこうと考え活動してきました。相手の立場に立って記事を読ませることが、主体的な読みと表現力を高めると考え、「体験を通して、新聞とかかわり、主体的に受信・発信のできる子ども<学級の中核的な活動と関係する新聞記事を利用して>」を研究テーマに据えて実践してきました。

昨年度、外国籍の友だちが2人転入してきた実践学級では、外国籍の友だちと新しい生活が始まったが、すぐに言葉の壁にぶつかりました。毎日の生活には、気持ちのすれ違いがたくさんありました。そんな子どもたちの姿を見て、「外国から来た友だちと、気持ちを伝え合い、友だちの輪を広げていこう」という活動を学級の中核的な活動とし、人間的な成長を願うことにしました。そしてこの子どもたちにとって必要感のある活動と、N I Eの活動を重ね活動してきました。「外国籍児童の就学援助について」の記事と出会った子どもたちは、「かわいそうだ」という表面的なものでした。自分たちのクラスにいる外国籍の友だちのことは、子どもたちの視野にはありませんでした。しかし、子どもたちは、外国籍の友だちと交流を深めることで、相手の立場を理解し、始めに出会った新聞記事「外国籍児童の就学援助について」をとらえ直すことができました。新聞記事に書かれている外国籍児童は、実は自分たちのクラスにいる友だち（アキラ君やメリーサさん）のことなんだと、人ごとではないんだということが分かるようになってきたのです。

この子どもたちの姿が願う子どもの姿であり、自分と外の世界をつなぐ扉を開いた瞬間ととらえ、本年度のテーマを「体験を通して、新聞とかかわり、主体的に受信・発信のできる子ども」～記事を書いた人や記事の向こう側にいる人の思いに寄り添いながら、自分と外の世界をつなぐ扉を開こう～と設定し活動していこうと考えました。

\*アキラ君もメリーサさんも今は転校してクラスには在籍していない

### (2) 活動の内容

- ①学級のN I Eの活動方針を決め組織を作る。
- ②自分たちの活動に関係する新聞記事を読もう。
- ③新聞記者にインタビューをしよう。
- ④新聞ができるまでを調べよう。(社会科や国語科と関係付けて)

- ⑤ 一人一人の将来の夢が新聞に載る。(中日新聞からのプレゼント)
- ⑥ 自分たちの活動を発信しよう。(5年3組とゆかいな仲間たち 情報誌 発信)

## 2. 実践の内容

### 豊科北小学校5年3組NIE子ども記者クラブ

#### ～5年3組とゆかいな仲間たち～

4年生から外国の友だちを理解しようと、様々な活動をしてきました。「外国籍児童の就学援助について」の新聞記事から、自分のクラスにいる外国籍の友だちのことに目を向け、交流を深めてきた。5年生になって子どもたちは、今度は、「外国籍の友だちや家族に自分たちのことも知ってもらおう」、また、豊科町の人に「クラスにはこんな友だちがいるんだ」ということを知ってもらおうと思い始めたのです。そこで子どもたちが考えたのが、活動内容の見直しです。そのために自分たちと同じ活動をしている団体や自分たちの活動に関係している情報がないかインターネットや新聞から探すことになりました。

子どもたちは、インターネットでは長野県国際交流推進協会のホームページを探し、その中の活動内容や情報誌を見つけ、新聞記事と同じことが問題にされていることを知りました。また、新聞記事を探す中で国際交流の観点だけでなくボランティアという広い視点から新聞記事を探し自分の考えを持っていきました。

#### (1) 活動内容の見直し

#### 【豊科北小学校5年3組NIE子ども記者クラブ～5年3組とゆかいな仲間たち～】

新聞当番 ——— NIE進行係 ——— 新聞当番

自分たちの考えを発信しよう ——— 新聞コンクールに挑戦

\*自分たちの活動を新聞に投稿しよう \*テーマ「自分たちの国際交流」

新聞のでき方 5年3組とゆかいな仲間たち 情報誌

\*自分たちの豊科町を紹介しよう

レストラン紹介 | 人気の遊び場スポット | 買い物マップ | 家庭用品

子どもたちは、「自分たちから発信しよう」というコンセプトで、活動内容をとらえなおしました。5年3組ゆかいな仲間たちという情報誌を作って、外国籍の友だちに発信しようと考えたのです。そこで、子どもたちは情報誌を作るために、新聞記事を参考にしたり、新聞のでき方を社会や国語の学習と関係付けて調べていきました。

(2) 自分たちの活動に関係する記事を探そう

自分たちの活動と関係している記事を探し、記事を書いた人や記事の向こう側にいる人の思いに寄り添いながら感想を書くことにしました。

**豊科北小学校5年3組NIE子ども記者クラブ**

氏名 **小林 遼太郎**

## 友だちの輪を広げよう


「記事を書いた人・記事の向こう側にいる人と関わりながら、自分と外の世界をつなぐ扉を開こう」

【調べたい新聞記事】


日本語をおぼえることで  
おたのびることができる。

日本語教室は世界に  
なくてはならないもので  
世界をつなげるものでもある。


最初はあからたしい




外国人




日本人



外国人



日本人



すずらん会の思い出を記事  
として発表するパットミニさん

外国人向けの日本語教室「開いた」会  
（すずらん会）を主催する外国人  
と日本人の交流活動「日本語教室」が  
佐久市野尻の野尻会館で開かれた。

10年の成果 記念集会  
佐久市で

ぼくはこの記事をえらんだあけはアキラ君やリリーカといっ  
はのクラスでやってきたけど外国からきたので言葉がつか  
ないからアキラたちはいやな思いをしたと思ってはみみん  
なといっしょにあそびたい言合して楽しくしたいとかはって日  
本語をおぼえようとしていたためこのすずらん会（日本語教室）  
をえらびました。たぶん記事にのっているパットミニさんも日本  
にきてくろしてはやく日本語をおぼえ日本人となかなくて  
いたかと思ったから日本語教室にいき10年間のがんばった  
成果をみながらきてもらうより日本人化あかりあえたと思はも  
ぼくも外国からきた人たちをこまら口ないように世界中の  
ボネテアもやってみたいです。

この感想を書いた児童は、新聞記事の中のパットミニさんを、クラスの外国の友だちに置き換えながら、彼女の思いに触れようとしている。子どもたちにとって体験こそ、記事の向こう側にいる人の思いに触れる大切な要因だと思います。

千曲市の女性らが今年設立した「奨学金里親プロジェクト」(左)沢田子代表は三日、歴代の歴代公民館で経過報告会を開いた。東北信地方からの里親に応募した約十人が参加。顔合わせを兼ねた報告会や里親紹介をしたほか、皆でタイ料理を味わった。



千曲市で開いた「奨学金里親プロジェクト」の経過報告会

## 奨学金負担 里親124人に

### 子ども支援プロジェクト

#### 「タイの子ども支援プロジェクト」

この新聞記事に、タイの貧困家庭の小学生の登校を支援するために里親を募集し、一人に毎月1000円の支援を行うという内容があった。その新聞記事を読んだ児童が次のような感想文を書いている。

自分の体験と比較しながら、この新聞記事の意味をとらえようとしているのが分かりました。

素直に、記事を書いた人や記事の向こう側にいる人の思いに寄り添いながら、自分と外の世界をつなぐ扉を開こうとしている姿が見られました。

タイの子どもは親がない、貧困とあこがれかわいそうだと思います。  
この新聞記事を書いた記者さんにも、「こんなプロジェクトがあるから是非入って欲しい」という気持ちがあったのかなあ。私と同じで親がないなんてかわいそうだったからこの記事を書いたのかなあ。この記事を書かれた人は、どう思うかなあ。私だったらこんな記事を書かれたら恥ずかしいけど…、  
だけど、みんな里親になって欲しいな。これが私の気持ちだけど、本当にこの記事を書いた記者さんや、書かれた人はどう思ったのかなあと思いました。  
やっぱり、「かわいそう」なんて思っはいけないかもしれない。私だったらいやだ!! どう感じればいいのか。この記事を書かれた人はこの記事を読んだのと同じように感じ、どう思えばいいのか。

#### (3) 新聞記者にインタビューをしよう

子どもたちは、上記の感想「本当にこの記事を書いた記者さんや、書かれた人はどう思ったのかなあと思いました。」にもあるように、新聞記者の思いや仕事に関心を持ち始めました。

N I Eの活動をしていると、新聞記者さんとの接点も身近になり、子どもたちは、今度、新聞記者さんが来たら、逆に疑問に思っていることを質問してみようということになりました。

5月に、中日新聞の記者さんが子どもたちのN I Eの活動について取材に来ることになりました。それはちょうど、自分たちの活動と同じような活動をしている団体がないかインターネットで調べる活動の取材でした。子どもたちは、この時とばかりに、日頃思っていることを質問しました。新聞記者になった理由、大変なこと、悲しかったこと、今までに感動したことなどの質問が多く出されました。

そのときの子どもたちの感想を紹介します。



中日新聞の記者の取材を受ける恭子さん



読売新聞の記者さん

私は、コンピューター室で、目に障害を持つ方がアイマスクをして、テニスをしている記事について調べていました。

すると、中日新聞の記者さんが来て、私に質問をいろいろしてきました。私は答えられなかったこともあいましたが、記者さんは、つまるところもなくとんとん質問をしてきました。私が答えたことが中日新聞に掲載していました。私は「こんなことはめったにない!」と、ちょっと嬉しくなりました。コンピューター室で、今度は、私が中日新聞の記者さんに質問しました。「1日に何ページできるんですか?」と聞いたら、「1ページくらいです。」と答えてもらった時、こう思いました。「自分は、1日に1冊できると思っていたけど、実際には、1ページくらいしかできないんだな。新聞記者さんは、最初、何を記事にするのかなと一つ一つ考えなければならぬので、1日に1ページくらいしかできないんだな。」とちょっと納得しました。新聞ページあつに気持ちがかもっているんだなと思いました。

中日新聞の記者の取材を受けた恭子さんの感想

私は、新聞記者さんにインタビューした時に、一番心に残った質問がありました。それは、「新聞記者になって、良かったことは何かありますか?」という質問でした。私はこんなことを言うのだろうと思っていたら、新聞記者の人が「とても感動した記事を書いたことです。」と言いました。私はあこい人だなあと思いました。新聞記者の仕事は、大変だと思うけれど、いい仕事、感動ある仕事なんだなと思いました。

子どもたちは、記者さんと話をしながら、仕事の大変さ、そしてやりがいのある仕事であることを知りました。また、子どもの感想にもあるように「新聞1ページずつに気持ちがかもっているんだな」と、記者さんの思いを感じることができるようになってきました。

(4) 新聞ができるまでを調べよう

# 新聞ができるまで

新聞明史

新聞ができるまでの流れ

- ①取材
- ②編集会議
- ③記事の組み合わせ
- ④転写
- ⑤印刷
- ⑥配達
- ⑦読者の手

## 1.

感想

新聞は私たちの生活に欠かせないもの。毎日読んで情報を得ることができて、とても便利。また、社会の動きや問題を知ることができて、自分の意見も述べることができる。新聞は私たちの生活を豊かにしていると思う。

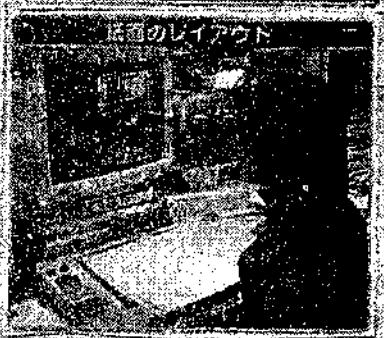
## 2.



3. 記事の組み合わせ

記事は(門)が打(休)社(休)のころから送信機で各社に伝送される。送信機は電線を介して各社に伝送される。電線は電圧が高いため、電線を絶縁するために電線を絶縁体で覆う必要がある。絶縁体は電気を導かない物質で、電線を覆うことで電気が漏れ出すのを防ぐことができる。電線を絶縁体で覆うことで、電線を安全に使用することができる。

写真



記事や紙面の組み合わせ

ここでは記事を見出しやイロハ、記事や写真などのよき配置(イロハ)の格が決められています。読者が読みやすいように紙面を組み合わせます。



転写

記事が決められた配置で印刷される前に、転写機で紙面に転写します。

転写機

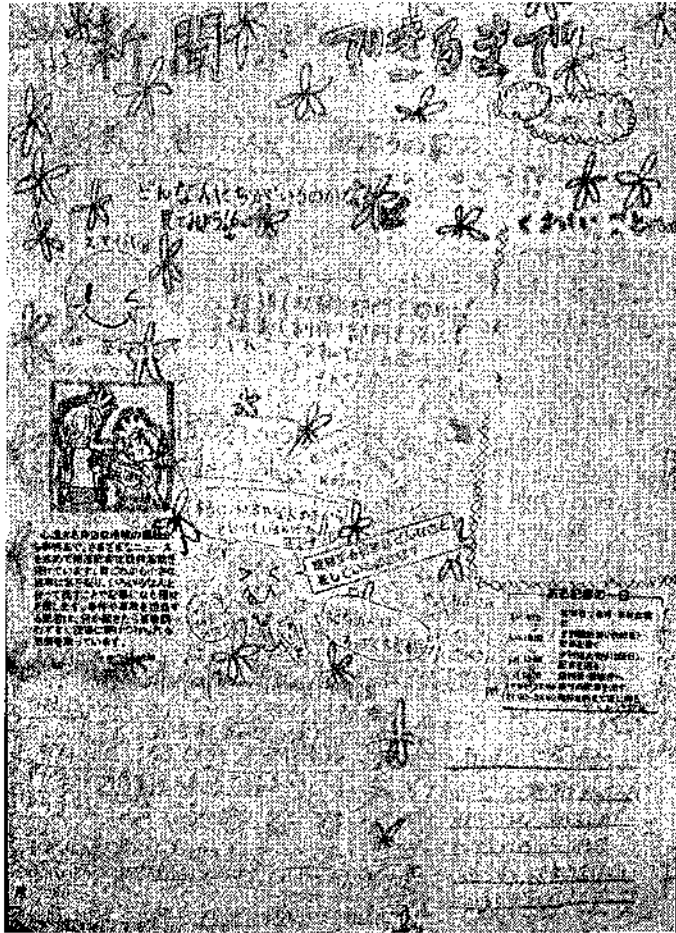


6印刷

新聞の印刷は、紙の厚さや乾燥具合によって印刷の良否が変わります。また、紙の質や印刷機の性能によっても印刷の良否が変わります。印刷の良否を判断するために、印刷機には色校正機や乾燥機などの装置が搭載されています。印刷機は、紙を巻き取り、インクを塗布し、乾燥機で乾燥させ、巻き取り機で巻き取るという工程を繰り返して新聞を印刷します。

乾燥機





子どもたちは、新聞記者さんに興味を持ち始めたと同時に、新聞ができるまでも興味を持ち始めました。小学校社会科の教育課程の中にも、新聞のできるまでを扱っている単元があります。

また、国語の単元の中には、文章表現力を培うために、新聞を作る活動があります。

そこで、本学級では、NIEを総合的な学習の時間で行っていますが、社会科と国語科と横断的に扱うことにした。

社会科では、子どもたちがインターネットなどから情報を得て、新聞ができるまでを調べまとめていきました。

国語では、新聞記事の構成を学習し、見出しからピラミッド型になっていることをとらえ、自分たちなりに集めてきた情報をまとめてみる活動をしました。

新聞ができるまでの活動を通して、子どもたちは、様々な感想を持っています。子どもたちの感想を、少し紹介してみます。

今まで記者の方が、こんなに私たちのために、一生懸命頑張っているなんて知りませんでした。この勉強をして良かったです。今後も記者の方々がんばって下さい。

私は、いつも家などで、何気なく新聞を読んでいたけれど、こんなに沢山の人が関わっていたことを改めてよく分かりました。いろいろ分かって良かったです。

子どもたちの感想を読んでいて、新聞のでき方の仕組みよりも、そこで働いている人たちのことに目が向いていることに気が付きました。紙面の関係で、本当にメッセージ程度の文章ですが、新聞記者さんやそこで働いている人たちへの思いが込められていることが分かりました。NIEの活動を通して、新聞記者さんに関わってきた子どもたちだからこそ、働いている人に目が向いたのでしょう。小学校という発達段階の子どもたちにとって、自ら体験したことが、子どもたちの考えや行動を動かしているのでしょうか。

この2年間の活動の中で、沢山の新聞記者さんと出会い、関わってきた子どもたちにとって、新聞記者さんの仕事は、NIEに関わっていない他の子どもたちよりも身近に感じたことは間違いないでしょう。これから子どもたちは、新聞記事を見た時に、自分たちと出会った記者さんたちが一生懸命書いているんだと思うことができるでしょう。

(5) 新聞社からのプレゼント（一人一人の将来の夢が新聞に載る）

新聞社の方から、5年生全員の将来の夢を掲載したいとお話がありました。自分が新聞に載るなんてめったにないことです。子どもたちにとって新聞社からのプレゼントだと思いました。自分が載る日がいつになるのか中日新聞を見ている子どもたちがいました。

私の夢

豊科北小5年 梶原朋

美 絵をかくのがとても好きです。マンガをよく参考に絵をかいています。今好きなマンガ家が二人います。一人は西

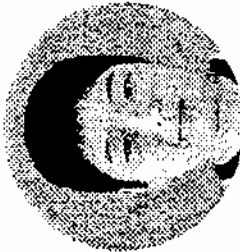


コマの井ノ上アツシが家、もう一人はストーリーもののマンガ家です。マンガ家は家が上手で、尊敬しています。将来はマンガ家になりたいです。

私の夢

豊科北小5年 滝澤大

いろんな風景をとるカメラマンになりたいです。いろんな季節の美しい山や花の写真をとってみんなに見てもらい



たいです。自然がどんどん壊れているので、世界中の国を回って写真を撮り、自然の大切さをみんなに分かってもらいたいと思います。

私の夢

豊科北小5年 藤原勇

二 ぼくのおはあちゃん目は目が不自由なので、字がよく見えなくていいます。だから、ぼくは大人になったら目医者に



なつて、おはあちゃん目をなおしてあげたいです。おねえちゃんもおまわり目がよくないので、二人の目をなおしてあげたいなあと思っています。

私の夢

豊科北小5年 坂根佐

奈 恵 今一番かなえない夢はピアノリストになることです。六年間ピアノをやっています。小さいころはピアノリストになりた

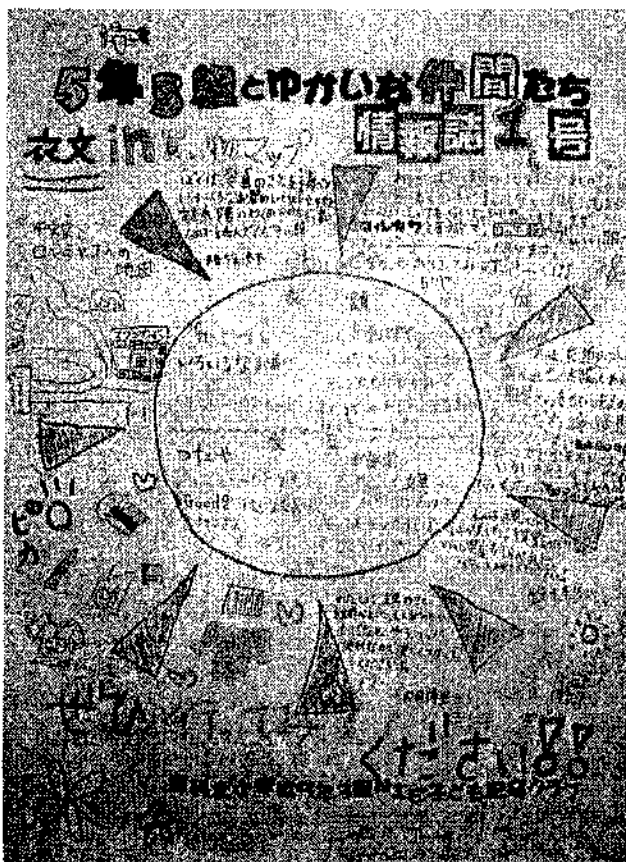


いと思っていますけど、小学生になってからなりたいと思いました。これからも頑張って難しい曲にチャレンジし、コンクールに出たいです。

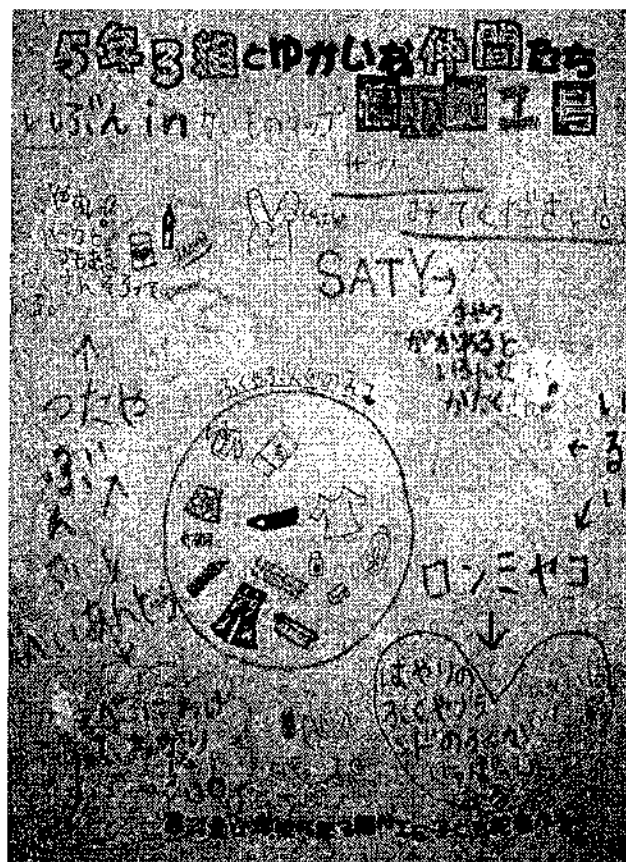


## (6) 5年3組ゆかいな仲間たち 情報誌 発信

4年生の頃から、活動してきた外国籍の子どもたちとの交流は、5年になりもっと自分たちの町、豊科町を知ってもらおうと、アキラ君やアキラ君の家族に向けて情報誌を出そうということになりました。子どもたちは幾つかのグループに分かれて、豊科町の情報を発信することになりました。グループは4つに分かれていて、「レストラン紹介」、「買い物マップ」、「家庭用品」、「人気の遊びスポット」の4つの内容で情報誌を発行しようと考えました。子どもたちは、自分たちが知っていることを情報として流すことにしました。



始めて書いた情報誌



アキラ君に見てもらって書き直した情報誌

買い物マップのグループでは、自分たちの知っている情報を一生懸命、集めてきました。上の写真は、左側が始めに作った情報誌です。5年3組とゆかいな仲間たち 情報誌 1号として、細かく書かれています。子どもたちは、すぐ、アキラ君に見てもらいました。すると、アキラ君は「分からない」と言うのです。一生懸命作った子どもたちは、大きなショックを受けました。と同時に、発信する相手のことを考えていなかったことに気がきました。そこで子どもたちは、書き直すことに決めたのです。文章を要点のみにし、または単語のみにし、分かりやすくしようと心がけました。漢字もぐっと減らしました。そしてできたのが右側の情報誌です。子どもたちは、すぐに、アキラ君に見てもらいました。アキラ君は「分かる」と言うのです。情報誌を作った子どもたちも、やっと、分かってもらえる情報誌ができたことに満足感と達成感を感じていました。自分たちが情報を発信する側に立った時、いかに相手に分かってもらえるかが本当に難しいことが分かった体験でした。相手理解に上に立った情報発信でなくてはならないことを学んだ姿でした。

## (7) これからの活動

### ＜自分たちの活動を発信しよう＞

情報誌を喜んでくれたアキラ君が、家の都合で子どもたちとお別れもできずに転校してしまいました。以前にも転校騒ぎがあったのですが、アキラ君がどうしても北小がいいというので、一月もしないうちに戻ってきたことがありました。しかし今回は、確実に転校ということで相手校からも連絡が届きました。本当にお別れになってしまいました。

子どもたちは、外国籍児童の就学についての問題が本当に難しいことを実感しました。子どもたちは今までの活動について、自分たちの考え方を発信することになりました。自分たちの今までの活動をまとめ、全校に知らせたり、もっと多くの人に知ってもらうことにしました。今現在、その具体的な方法を考えながら活動しています。



親の仕事の関係で転校していったアキラ君を囲んで撮った最後の写真

## (8) 今までの活動を振り返って（成果と課題）

「体験を通して、新聞とかかわり、主体的に受信・発信のできる子ども」  
～記事を書いた人や記事の向こう側にいる人の思いに寄り添いながら、自分と外の世界をつなぐ扉を開こう～のテーマで活動してきた2年間、子どもたちは、一つの新聞記事「外国籍児童の就学援助について」と出会い、具体的な活動を通して理解を深めてきました。NIEの活動に出会い、子どもたちは貴重な体験をしました。この発達段階の子どもたちにメディアリテラシーの力をどのように育てていったらよいか、方向性が見えてきました。一つの新聞記事には、様々な人が関わっていること、新聞記事を書いた人、新聞記事の向こう側にいる人の思いがあること知り、実際に関わり、それらの人々の思いに触れることで、子どもたちにとって実感の伴った理解がなされること、一つの記事でいいから以上のような体験の機会を与えてやるのが大切だと思いました。小学生にとって記事への関わり方を学ぶことが、新聞を活用できる子どもが育つことにつながると思います。